一二、日本聖公会宣教一五〇周年記念　主教会教書

（二〇〇九年（平成二一年）五月三一日）

一八五九年六月、米国聖公会宣教師で後に主教となるチャニング・ムーア・ウイリアムズが長崎に上陸、一ヶ月前に長崎入りを果たしていたジョン・リギンズ司祭と合流して日本宣教の第一歩を記してから一五〇年目の年を、わたしたちは迎えています。ウイリアムズ主教の日本上陸に先立つこと一三年、英国海軍琉球伝道会によって派遣されたバーナード・ジャン・ベッテルハイム医師が沖縄に上陸、キリスト教を宣教し、医療活動を行い、また琉球語訳聖書を残しました。今わたしたちが祝う一五〇年は、日本聖公会の組織的な福音宣教につながるウイリアムズ主教の上陸を起点としていますが、それに先立つベッテルハイムの働きがあったこと、またウイリアムズ主教の周囲にも日本伝道の重要性を認めて尽力した人々のあったことを忘れることはできません。

やがて英国福音伝播協会（ＳＰＧ）と英国教会伝道協会（ＣＭＳ）、アメリカ聖公会の海外伝道局、後にはカナダからの宣教師たちが日本での働きを開始し、日本聖公会にはカトリック的、また福音主義的な幅広い伝統と慣習がもたらされました。一八八七年には、日本人自身による自立した教会形成のために尽力した宣教師たちの洞察と努力により、日本聖公会第一回総会が大阪で開催されています。そしていまだキリスト教に対する無理解や偏見の強かった当時の社会の中で、教会の設立をはじめ、幼児保育、教育、医療、社会福祉事業の諸分野において、日本聖公会は各地で先駆的な働きを開始しました。今日まで続くそれらの働きの草創期を担った海外からの宣教師たちと日本人の教役者、信徒すべてに対して、わたしたちは心から感謝いたします。

ウイリアムズ主教の上陸から約五〇年後、一九一〇年の「日韓併合」に象徴されるように、その後の日本は軍国主義国家に向けて突き進んでいきました。圧倒的な時代の流れの中ではありましたが、教会は国家の戦争、特にアジア諸国への日本の侵略、植民地化に対して、キリスト教の信仰、福音に基づいた明確な理解や姿勢を持って発言することが出来ず、また一九四一年に公布・施行された宗教団体法によっては、聖公会自身が教会としての一致を揺さぶられることとなりました。当時の教会に連なる人々の労苦を思いつつも、わたしたちはこれらの歴史を覚え続けなければなりません。

一九四五年、敗戦を迎え、「焼け跡」からの復興の時代、長い軍国主義の重圧から解放された人々の心をキリスト教が惹きつけ、改めて欧米文化への窓口としての役割を教会が果たした時期もありました。しかしやがて高度経済成長が叫ばれ、物質中心的な大量消費社会が到来する中で、教会の存在意義も大きく変化してきました。

一九六三年、カナダのトロントで開かれた世界聖公会大会（パン・アングリカン・コングレス）では、世界の聖公会、諸教会間の「相互責任と相互依存」（略称ＭＲＩ）という考え方が提起され、やがて一九七〇年代までには、日本の宣教の業に多大の貢献をした海外聖公会からの宣教師たちが、ほとんど自国に引き上げました。日本聖公会は、管区としても各教区においても、もはや海外諸教会から「与えてもらう」教会ではなく、世界の聖公会の中にあって相互的な責任を担い、精神的、財政的に自立するべき時代を迎えたのです。同時に世界的な社会状況の変化と教会の宣教についての考え方の変化の影響を受けながら、日本聖公会も新しい教会の姿を追求してきました。その中から、新しい祈祷書（一九九〇年）、新しい聖歌集（二〇〇六年）が生み出され、また神学上の立場の違いはありながらもそれを尊重しつつ、日本聖公会総会は女性の司祭按手を認める決断をいたしました（一九九八年）。

また、わたしたちは太平洋戦争に至る歴史の中で、日本の侵略と植民地化によって被害を受け、後には日本の経済発展によって新たに経済的支配にさらされることとなった国々の人々と、悔い改めをもって和解と共生

の関係を深めたいと願ってきました。

とりわけ、日本が、朝鮮半島を侵略した歴史への反省と謝罪を十分に為し得ずにいた時から、大韓聖公会は同じ信仰を分かち合う兄弟姉妹として、日本の歴史認識の不十分さや誤りを指摘しつつ、同時に個人、教会、教区、管区などさまざまなレベルでの交流の門戸を開いてくださいました。二〇〇四年には福岡で日韓聖公会宣教協働二〇周年記念大会が開催され、特に二〇〇七年以降、日本における福音宣教に召命を与えられた大韓聖公会の教役者たちが、両管区の協定に基づいて日本各地で奉仕されることとなり、今日では一〇名を超える宣教協働者を迎えています。

フィリピンやパプア・ニューギニア等、戦争中日本軍によって被害を受けた国々に対しても、日本聖公会は和解と、同じ主にある関係の回復を願い求め、また同時にそれらの国々から多くの豊かな信仰的経験を与えられてきました。

一九七二年、二七年間の本土からの分離の中で苦難の道を歩んだ沖縄が日本に返還され、沖縄教区が日本聖公会の一枝に加えられましたが、今なお、基地の重圧に苦しむ沖縄を通して示される平和への課題をわたしたちは真摯に受け止め、主にある平和の実現に向けて歩むことが求められています。

今日、宣教一五〇周年を迎えた日本聖公会では、宣教師たちによってもたらされた宣教・伝道への大きなエネルギーが十分に継承されず、日本社会に住む者としての信仰の表現を、いまだ十分に見出せずにいるように思えます。信徒数、教役者数の減少、会衆全体の高齢化等と一朝一夕には解決出来ない問題を抱えており、各地で司祭不在の中、数人の信徒で主日礼拝を守り続けている教会も数多くあります。その方々の熱心なご奉仕に感謝し、主の特別な祝福を祈ります。しかし、このような状況の中でも、若い方たちの熱心で活発な集いが、全国青年大会をはじめ、各地で続けられてきました。五旬祭の日、聖霊降臨の出来事において、ペトロは旧約聖書『ヨエル書』の言葉を引きながら「あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る」と声を張り上げます。また聖パウロはテモテに対して「時が良くても悪くても」聖書を読み、教え、働き続けることを求めています。

今、わたしたちは、この一五〇年間に与えられた大きな恵みを振り返りながら、成し遂げてきたこと、しようとして出来なかったこと、そしてまた気づかずにいた多くのことを思い巡らします。

礼拝が「レイトゥルギア」(人々の業)と言われるように、教会は何よりも「神の民」の共同体です。キリストの福音と愛を伝える器として召されたわたしたちは、どこにあっても、教会の礼拝に集められ、み言葉と聖餐によって養われ、この社会に派遣されていきます。信徒の働きと参加は聖職の働きと同様に大切であり、教会は自分白身のためだけではなく、特に社会の中で小さくされている人々の中に神様の臨在と働きを見出し、奉仕する使命を持っています。これらの働きは聖公会のみならず、教派を超えた教会間の対話と宣教協力のうちになされるものでもあります。

日本聖公会は小さな群れでありながらも、大きな痛みと分裂を経験するこの世界の中にあって、平和と和解のメッセージを、自らの悔い改めと共に語り続けることを、全聖公会(アングリカン・コミュニオン)の中で期待されています。同時に、二〇〇八年のランベス会議が示したように、多様な賜物を持つ世界の聖公会の家族と共に歩み,共に分かち合おうとする姿勢、そしてお互いの様々に異なった経験を丁寧に聴きあおうとする傾聴の姿勢は、わたしたちが求めて進むべき、二一世紀の教会の大切な姿であると信じます。

宣教開始一五〇年を迎えるわたしたち、日本聖公会の全教会、および関連するすべての働きの上に聖霊の祝福と導きがますます豊かにありますように祈ります。「沖に漕ぎだして、網を降ろしなさい」と言われた主イエスのみ言葉を心に刻みつつ、大きな感謝をもって祝い、同時に新しい決意をもって一五一年目へと漕ぎ出し

てまいりましょう。

「話し終わったとき、シモンに、『沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい』と言われた。シモンは、『先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう』と答えた。」（ルカによる福音書五章四、五節）

二〇〇九年五月三一日　聖霊降臨日

日本聖公会主教会

首座主教・北海道教区主教　ナタナエル　植松　誠
東北教区主教　ヨハネ　加藤博道
北関東教区主教　ゼルバベル　広田勝一
東京教区主教　ペテロ　植田仁太郎
横浜教区主教　ローレンス　三鍋　裕
中部教区主教　フランシス　森　紀且
京都教区主教　ステパノ　高地　敬
大阪教区主教　サムエル　大西　修
神戸教区主教　アンデレ　中村　豊
九州教区主教　ガブリエル　五十嵐正司
沖縄教区主教　ダビデ　谷　昌二